

白内障

中村 龍介

一年ほど前から左眼が何となく霞んで見えるのに気付いていた。そのうちに治るだろうと高をくくっていたが、症状は徐々に悪いほうに向かった。

今年は運転免許更新の年。誕生日が近づくにつれて不安が膨れてきた。視力検査に落ちるかもしれない。

勇を鼓して眼科の診察を受けることにした。症状から大体の察しはつく。加齢からくる白内障に違いないと自己診断。その分野では定評のあるW眼科病院を訪問した。

広い待合室はたくさんの患者でごった返していた。一方、診察はテキパキと進む。大学病院とは異なるところだ。ほどなく、私の名前が呼ばれた。

まず、検査室で視力検査。続いて眼圧、眼底の検査があり、部屋を移動して超音波による検査や緑内障検査、心電図まである。一通り検査を終えると医師の診察を待つ。

診察室は四箇所あり、常時、四人の医師で多くの患者を捌いているようだ。私の呼ばれた部屋には「中山」と名札がかかっていた。中山先生は誠実な感じの女医。アラフオーとみた。検査データに目を通し、角膜顕微鏡で両眼をチェックした後、断定的に言った。

「左は白内障がかなり進んでいます。手術をお勧めします。右は直ぐに必要ではありませんが、両眼ともなさったほうが視力は安定するでしょう。緑内障はありません。」

更に追加して、

「今決断できるようなら直ぐに入院の予約を取って下さい。」病院に入って一持間余りで結論が出た。大学病院なら未だ待合室で診察を待っているころだ。そのスピード感に小さな感動を覚えて、即座に手術の日程を決め病室を予約した。

白内障の手術は日帰りも可能だと聞くが、片方に三泊四日、両眼では六泊八日の入院だという。事前の準備と術後の感染予防に万全を期するのが病院の方針らしい。こちらとしても、その方が安心だ。

入院なんて何年ぶりだろう。十八歳のとき虫垂炎の手術をして以来だ。入院期間中の過ごし方を想像しても、俄かにはイメージが湧かない。テレビ付きの個室を予約したので退屈することはないだろう。それでも、ノートパソコンと何冊かの本を持ち込むことにした。

入院の日が来た。手術に先立つ最終検査は入念を極めたが、手術自体は思ったより簡単に終わった。だが、事後のケアは予想をはるかに超えるものだった。左眼の上には顔の半分が隠れそう、大きくて分厚い眼帯がテープでしっかり留められている。その眼帯は二十四時間外せない。翌日、眼帯が取れた後は、ゴーグルのような保護眼鏡を装着。自分の眼鏡を使うチャンスがない。本を読めるような状態ではなく、ましてやテレビもパソコンも殆ど点ける気分ではなかった。

とはいえ、入院中の四日間は意外に快適だったといえる。病院内は清潔で気持ちよく、病院食も御馳走にはほど遠いが美味しく食べることができた。看護婦さんたちは親切だし、患者目線の中山先生も信頼できる。手術直後、病室まで来て詳しい経緯を説明してくれた。そして、何よりも左眼の視力が大きく改善したことが気分を明るくした。

次回、右眼の手術が二週間後に控えている。今度は書物やパソコンは止めて、ラジカセを持参しようと思う。ベッドに寝転がってニュースや音楽を聴くのも悪くない。CDは何を持っていいのかな。クラシックそれとも演歌？

想像するだけで楽しい。何となく、次の入院が待ち遠しくなった。

(了)

〔二〇一二年十月記 原稿用紙約四枚 課題「ラジオ」〕

